PRESS RELEASE　2013 年 8 月吉日　No.947

「加賀百万石―金沢に花開いたもう一つの武家文化―」展

2013 年 10 月 2 日（水）　～　12 月 14 日（土）

パリ日本文化会館展示ホール

国際交流基金では、パリ日本文化会館展示ホールにて「加賀百万石―金沢に花開いたもう一つの武家文化―」展を開催いたします。

戦国武将・前田利家を初代藩主とする加賀藩前田家は、幕藩体制確立後、美術・文化・芸能のために百万石の財力を注ぎ込みました。各種の優れた文物の収集をはじめ、武家の嗜みとして重要な位置を占めるに至った茶の湯や能を奨励、また京都や江戸から名工や一級の文化人を招いたほか、御細工所を設置し名工を指導に当たらせることなどを通して、匠の地元定着にも努めていきます。その結果、京都の公家的な文化の滋養を吸収しながらも、江戸の無骨な武家文化とは趣を異にする、独特な武家文化が金沢の地に花開きました。

明治以降の近代化にともない、日本各地から江戸の息吹を伝える伝統文化が姿を消していく中、金沢においてはよく踏襲・保持され、今日もなお漆芸や金工、染織を中心に芸術院会員や人間国宝を輩出するなど、伝統工芸の中心地としての光彩を放ち続けています。

侍や城に象徴される近世日本文化のイメージは海外においても広く定着していますが、本展覧会は、人々の精神的支えであって、生活と深く結びつくことによって成立した「もう一つの武家文化」を、パリの観客にわかりやすく伝えるものです。

紅糸威仁王胴具足（村井長頼）
16 世紀
石川県立歴史博物館

展覧会概要

【会期】　2013 年 10 月 2 日（水）　～　12 月 14 日（土）　※11 月 4 日（月）一部作品の展示替え
【会場】　パリ日本文化会館展示ホール
【主催】　国際交流基金／パリ日本文化会館
【共催】　金沢市
【後援】　石川県
【キュレーター】末吉守人（美術史家）

【問い合わせ】
展覧会に関するお問い合わせ ： 文化事業部　欧州・中東・アフリカチーム　田崎、大川
電話 03－5369－6063　E-mail: Keiko_Tasaki@jpf.go.jp, Keiko_Okawa@jpf.go.jp

広報用画像・取材のお問い合せ
平昌子（TAIRAMASAKO PRESS OFFICE）　電話 090－1149－1111　E-mail: info@tmpress.jp

国際交流基金
〒160-0004　東京都新宿区四谷 4-4-1
www.jpf.go.jp

加賀百万石―金沢に花開いたもう一つの武家文化　企画趣旨

金沢は、百万石という最大の石高を誇る加賀藩前田家の城下町として栄え、江戸でもない、京都でもない独自の武家文化を形成し、その伝統が現在まで息づいている町である。

江戸時代、加賀藩前田家は徳川将軍家に次いでの石高を持つ大名であるため、幕府から警戒の目を向けられた。それを避けるため、百万石の経済力を武力ではなく文治の政策に投入し保身に努める。たとえば、書物奉行、茶道奉行、御細工所奉行といった役職を設け、他藩には見られない独自の文治政策を推し進める。その一つ、「御細工所」は、初代利家（1537～1599）、二代利長（1562～1614）の時代に、武器・武具を修復管理する機関として置かれるが、それを三代利常（1593～1658）は、武から文治の時代に入ったということで、大名調度品を制作する、今日でいう工芸工房的性格を持った組織へとその職務の内容を転換する。活動が最も充実・発展したのは五代綱紀（1643～1724）の時代で、細工の分野も漆細工、蒔絵細工、紙細工、象嵌細工など二十四種を数え、細工人も百人を超えるなど当時の幕府の細工所を凌駕するほどであった。

利常は、優れた文物を製作するには優れた指導者が必要であると考え、当時の文化先進地であった京都や江戸から、室町時代以来の名家と呼ばれた蒔絵の五十嵐家や金工の後藤家などを御用職人として招き、御細工所細工人の指導に当たらせ、技術の優秀さと意匠の斬新さで高い評価を受けた加賀蒔絵、加賀象嵌の礎を築きあげる。また、染織では京都で友禅染を完成させた宮崎友禅斉、絵画では当時最も権威を誇った狩野派の狩野探幽、その門下の久隅守景を招く。刀剣研磨と鑑定の本阿弥家をとりたて、なかでも光悦は刀剣の他にも能や茶道に通じており、金沢にたびたび来訪した。茶道では利休のひ孫仙叟宗室も招かれ、金沢に裏千家の茶道を広めるなど第一級の文化人を呼び寄せ、加賀文化の基礎作りが行われた。さらに利常は、茶人・金森宗和とその子七之助、そして徳川将軍茶道指南でもあり、幕府作事奉行であった小堀遠州を取り立てる。遠州の果たした役割は大きく、茶道具の見立てから購入、飾り、前田家の関係する建築物、作庭などにアートプロデューサー的な立場として深く関わり、加賀文化に共通する洗練された造形美の形成に寄与した。

徳川幕府は 1633 年から 36 年にかけて幾度か鎖国令を発布し、これにより日本の貿易のルートは、唯一長崎の出島から中国・オランダとの間に限られるが、利常は 1637 年、長崎の平戸に海外からの輸入品を買い付ける御買物師として家臣２名を常駐させ、長崎に入荷した海外からの陶磁器、織物を価格かまわず買い求める。また、これらの御買物師を通してオランダのデルフト焼を輸入、後には、木型や粘土型の見本や文様見本帳も添えて注文するなど、文物に対する収集意欲は当時の大名としては破格であり、それらの名残は現在、前田家の文化財を継承する前田育徳会・尊経閣文庫に見ることができる。

古九谷といわれている陶磁器は、1655 年頃、利常の三男利治（1639～1660）が加賀藩から分藩された大聖寺藩初代となり、領内の九谷で肥前有田の窯業技術を導入して焼かれたといわれている。肥前地方以外にない磁器窯を最初に実現しようと試みたのは利常の強い願望と、美意識があったからこそと解される。古九谷にみられる奔放な色の配置と自由な意匠、そこには海外にまで視野を広げた、利常の美意識の高さと旺盛な収集意欲がうかがえる。

このようにして百万石の財力と歴代藩主、なかでも三代利常、五代綱紀の美意識によって培われた金沢の美術・文化は、京都のやわらか、雅、優美な公家的文化の価値観をうまく取り入れながら、武家の男性的で武骨な、それでいて江戸の武家文化などとは一味違った独特の武家文化を確立することに成功している。

藩主自身が芸術に強い関心を示し、文化を学び、保護育成につとめた金沢の地では、家臣や町の人々にも芸術・文化をめでる気風が生まれた。加賀蒔絵、加賀象嵌、加賀友禅、九谷焼といった美術工芸。茶道、能、和菓子を日常の生活のなかで楽しむ文化。これは、15・16 世紀のイタリア・フィレンツェの町とメディチ家の関係に似ているといえよう。日本の地方都市でこのような文化擁護の気風が残っている都市は珍しい。

末吉　守人
（本展覧会キュレーター、美術史家）

展覧会内容

１）加賀藩主前田家とその家臣たち

①

②

１６世紀後半、織田信長や豊臣秀吉に仕えた前田利家は、北陸に領地を与えられて戦国大名となり、日本最大の藩・加賀藩の基盤を築きました。１７世紀に入ると、中央（江戸）に徳川幕府、地方には旗本領や大名領（諸藩）が設置され、鎖国制度の下で円熟した武家文化が展開していきます。加賀藩では前田利家を初代として１４人の藩主が継承し、江戸と京都との活発な交流のもとで文化の拡散・集積がスムーズに行われました。

加賀藩では、藩主のもとに約１５０００家の家臣がおり、５００００石から１０１００石でいずれも万石を超える大家が八家ありました。この八家を頂点として、家禄や担当業務などによって組分けして家臣は組織されていました。

金沢はこの加賀藩の首都にあたり、金沢城を中心に城下町が形成され、城の周辺を中心に家臣団が集住しています。犀川と浅野川の二つの川に挟まれた市街地に大小さまざまな武家屋敷が存在し、１８世紀初頭の人口は１０万人を数え、江戸（東京）・大坂（大阪）・京（京都）に続く大都市として知られていまいした。

展覧会の冒頭では、加賀における文化の発展を支えたこの歴史的な背景を、藩主家と上級家臣家の資料を中心に、前田家ゆかりの武具や着物、美術・工芸品の展示を紹介しています。

①前田利家画像　/　江戸時代　17 世紀
尾山神社
②紅糸威仁王胴具足（村井長頼）/　16 世紀
石川県立歴史博物館

２）茶の湯の流行

③

「歴史」セクションのあとには、加賀文化を代表する「茶の湯」「能」「工芸」の３つのセクションごとの展示が続きます。

まずは「茶の湯」です。加賀藩主前田家の初代利家は秀吉に重臣として仕え、千利休に茶道を学びました。
利家は、秀吉、利休の茶会に招かれ、また彼らを茶会に招き、利家の長男で前田家２代利長も利休に茶道を学び、茶会を通して互いに友好を深め、茶道を愛好しました。利家が築いた城下町金沢で茶道が盛んになった始まりにはこのような歴史があります。前田家３代利常、４代光高は当時の茶人として著名な小堀遠州に茶道を学び、特に利常は茶道を愛好し、名品の収集に力を注ぎました。

今回の展示は①「名品展示」、②「広間の茶会の道具」、③「小間の茶会の道具」の３部構成となっています。「名品展示」の部では江戸時代に藩主前田家、その重臣の家で収集された名品を展示し、続く「広間の茶会の道具」の部は重要な客を招いて開く格式の高い道具を紹介します。そして「小間の茶会の道具」の部では、会場の中に茶室を再現し、毎年１０月に開かれる茶会で用いられる秋の茶道具の展示を通して、「侘び」の世界を紹介します。

④

③樫鳥図　/　松花堂昭乗筆　玉舟宗璠賛
江戸　17 世紀　/　瑞龍寺
④禾目天目茶碗　/　南宋　12～13 世紀
那谷寺

〒160-0004　東京都新宿区四谷 4-4-1
www.jpf.go.jp

３）能の世界

14 世紀末に生まれた能は将軍や上級武士の庇護の下で発展しました。世阿弥（1363～1443）の出現により芸術性を高め、西洋のオペラやミュージカルに似た今日のスタイルを完成させます。前田利家は、時の権力者豊臣秀吉の影響で自らも能や狂言を演じています。加賀藩の歴代藩主は幼少期から能の稽古を始め、公式行事としての能楽には御手役者や町役者を出演させました。

江戸時代になると、能は武家の式楽（公式の儀礼の場などで催される芸能）とされ、茶とともに武士たちの必須教養として重要な社交ツールとなります。有力大名らは贅を尽くした絢爛豪華な能装束を制作し、文化の成熟度を競いあいました。とりわけ能を愛好した加賀藩前田家では、当時、1000 点を越える膨大な数の能道具を所有しており、本展では、加賀藩前田家に伝来した能面をはじめ、前田家ゆかりの能道具を中心に、華麗なる能の世界をご紹介します。

⑤

⑥

⑤紅地露芝に雲菊鉄線文縫箔
江戸～明治　19 世紀　/　金沢能楽美術館
⑥般若
江戸時代　/　尾山神社

４）加賀の工芸

今日、加賀と名のつく工芸は加賀蒔絵、加賀象嵌、加賀友禅に代表されますが、その始まりは初代藩主利家、２代利長によって武具、甲冑の製作・修理・保管をおこなう機関として整備された加賀藩御細工所にありました。武具甲冑の製作には金工、漆、染織といった高度の工芸技術が必要とされ、そのために江戸、京都から第一級の技術者を招き、御細工所での製作と職人指導に当たらせていました。漆工では蒔絵の五十嵐道甫、清水九兵衛、金工では後藤顕乗、覚乗とその門人などです。

金沢には前田家が入国する前から梅染という無地の染物があり、その一部に色絵の紋を染め抜く技法がおこなわれていました。それらは加賀紋や御国染などと称していましたが、５代綱紀の時代に京都から友禅染の技法が入ってくると、それに啓発されて加賀でも色絵の染物が始まり、やがて京都をしのぐ勢いで発展し、小袖や夜着、染幅の優品が作られます。色絵の焼き物は、金沢では１９世紀初めまで行われませんでしたが、１７世紀中頃、３代利常の三男利治が加賀藩から分藩された大聖寺藩初代となり、その領内九谷村において色絵焼き物の先進地であった有田から、窯業技術を導入して九谷焼を始めます。いわゆる古九谷と称されている焼き物です。

加賀の工芸は、加賀藩御細工所を中心に興った工芸品で、量産よりむしろ一品製作を主とした茶道具、調度品、高級家具などですが、それらに共通するのは高度な技術と斬新なデザインを要したものです。その伝統は、現在まで受け継がれ、日本でも数少ない美術工芸の盛んな土地柄となって、日本を代表する工芸作家を数多く輩出しています。

⑦

⑧

⑦秋草蒔絵沈箱　/　五十嵐様式
江戸時代　17 世紀
⑧青手波に蝶図平鉢　/　江戸時代　17 世紀
金沢美術工芸大学

〒160-0004　東京都新宿区四谷 4-4-1
www.jpf.go.jp